地域づくりの原動力

地域づくりに携わる人々が集うシンポジウム「いしかわ地域づくり円陣」が、能登町を舞台に開催された。『光をあてる　磨きをかける　未来につなぐ』をテーマに、世界農業遺産をキーワードに、地域の宝物とは何か、課題をどう克服するのか、どうすれば後世に伝えられるのか―熱い議論が交わされた。

エンジンと円陣

「地域づくり円陣」は、地域づくりの原動力としての『エンジン』と、意思統一しながら士気を高め合う『円陣』をかけ合わせたもの。

地域づくり団体が一堂に会し、県内外のコーディネーターやゲストを交えて活動を発表し、課題を探り、交流を深めるシンポジウムで、石川地域づくり協会が平成8年から開催している。

17回目となる「いしかわ地域づくり円陣２０１２」は9月8日、能登町を会場に開催された。今年のテーマは『光をあてる　磨きをかける　未来につなぐ～世界農業遺産「能登」から学ぶ～』。県内の地域づくり団体から約２００人が参加し、分科会、全体会、交流会というスケジュールで実施された。

午前中は、能登町内の地域づくり団体が企画・協力し、四つのテーマに別れて分科会が行われた。（分科会の内容は次ページに詳しく掲載）

午後3時からは、会場を国民宿舎能登やなぎだ荘に移して全体会が開かれた。全体会ではまず、『石川地域づくり表彰』の表彰式が行われた。能登町からは団体部門大賞に『春蘭の里実行委員会』、個人賞に宮本康一さん（NPO法人のとキリシマツツジの郷理事長）が選ばれ、うれしいダブル受賞となった。

地域づくりは、
先人から託されたタスキを
次代につなぐこと。
キミにつなぐタスキはありや。
地域からなにを受け取り、
未来になにを伝えるのか。

（いしかわ地域づくり円陣２０１２コンセプトより抜粋）

地域づくりの共通する課題

表彰式のあとは『ひな壇トーク』と題して、各分科会のコーディネーターとゲストが成果を報告した。進行役の濱博一さん（協会コーディネーター）が報告者への質問を投げかけ、少しずつ課題を浮き彫りにする。

見えてきた共通課題は、いかに地域の宝に磨きをかけて未来へつなぐか。それは、場所や活動内容が違っても、地域づくりに共通する課題でありテーマと言える。濱さんは「今回の円陣開催を受けて、能登町の各団体が今後どのように活動を続けていくのか期待したい」と話して全体会を締めくくった。

全体会のあとは特産品を持ち寄った交流会。参加者はそれぞれ交流を深めながら意見を交換した。会はさらに『夜なべ談義』へと続き、語り明かした。

地域づくりの情熱を持った人が能登町に集まった熱い熱い一日が終わった。地域づくりの原動力は、地域を思う『人』。参加者は、その情熱をさらに燃やし、それぞれの地域へと戻っていった。

4つのテーマで開かれた分科会。地域の宝物に光をあて、課題を見つけて磨きをかける。

【第１分科会】
グリーンツーリズム 農家民宿で農村再生

若者が戻ってくる地域を探る　月収 40 万円と高齢者が地域の資源【協力団体：春蘭の里実行委員会】

限界集落を若者の声があふれる農村に再生しようと農家民宿の里づくりを進めている「春蘭の里」。農村での仕事づくり、観光客への対応、農業の再生、農村に若者が帰ってこられる条件などについて、能登に移住している若者にも参加してもらい探っていく。

【第２分科会】
まちは大きな博物館

「プチミュージアムの郷プロジェクト」と「奥能登トリビア蔵」を考える【協力団体：民有「歴史文化」資産の保存活用を考える会】

民家の土蔵や地域に眠る伝統文化を掘り起こし、地域振興に生かす活動を続ける「民有『歴史文化』資産の保存活用を考える会」。町全体を大きな博物館とする「プチミュージアムの郷プロジェクト」について考え、その手法のモデル性と効果性、問題点を検証する。

【第３分科会】
私たちは世界遺産を育てている

“のとキリシマツツジの郷”構想のアイデアを話し合う【協力団体：NPO 法人のとキリシマツツジの郷】

奥能登には樹齢 100 年超の古木があちこちの民家の庭で根を張っている。これは世界遺産クラスの文化。人と花木の共生を 100 年先まで続けるために、何をなすべきか。栽培主の高齢化、空家の庭の管理など問題は多い。実際に庭を見ながら能登の未来を考える。

【第４分科会】
元気が見えるバーチャンネットワークをつくろう

みんなで暮らすまちづくり！みんなそばにいる in 能登町【協力団体：能登町社会福祉協議会】

能登町では高齢化・過疎化が進んでいるにもかかわらず、ボランティア活動、町会活動が活発に行われている。実践者の声、行政の施策、社会福祉協議会の事業についての発表を通して、元気に暮らしていくための実践行動は何かを考える。

高橋森哉（ホスピタリティツーリズム専門学校）▽春蘭の里では親戚のように迎えてくれて「お客様」扱いされない。ホスピの生徒は春蘭に来ると変わる。春蘭には「能登に帰りたい」と思わせる力がある。自信を持ってほしい。

ヴァファダーリ・メッヘリージ・カゼム（立命館アジア太平洋大学観光学助教）▽農業を勉強するために農村を観光する。現在の農業には、安さだけではない価値が求められている。ジアスのブランド化も必要。

小柴有里江（農林水産政策研究所研究員）▽リーダーが引っ張るだけではなく、課題を共有してみんなで進んでほしい。看板やパーキングなど短期間でいろいろと変わったが、変わると同時に大切なものを残していってほしい。

多田喜一郎（春蘭の里事務局）▽これからは大学や高校、企業と連携していく必要がある。幸い春蘭の里にはいくつもの大学や専門学校が関わっているので、若者たちを中心に何か面白いことができると期待している。昨年は1万人以上が訪れた。年間2万人が春蘭の里に来れば集落としてやっていける。プラス思考でやっていきたい。

午前中は「松波城址情報館」と恋路海岸を現地視察。考える会の活動内容を説明した。午後からゲストを交えて意見交換会を行った。

大橋のり子（元石川テレビ放送アナウンサー）▽地域づくり活動の継続・発展には、町に対する熱い思いが必要。外から来る人は町の人の情熱に感動する。楽しさが伝わる、また来たいと思える町になってほしい。

瀬戸達（ＮＰＯ法人歴町センター大聖寺事務局長）▽私たちは最初バッシングを受けたが、外からのお墨付きがあると周囲の評価は変わる。無理をしないで、楽しく、できるところから始めること。今のままでは成功しないと思う。若者の本音を受け入れて応援する深い心を持った年寄りが必要。いろいろな失敗例から学び、若者や女性も参加する楽しい町づくりになってほしい。

埒正浩（㈱日本海コンサルタント専務取締役）▽能登の人は引っ込み思案。能登町総合計画にあるように「一歩前へ進む」ことが大切。自分たちが汗、知恵、場合によっては金も出さなくてはいけない。町づくりは楽しくやるのが一番。仲間を増やし、女性や子どもたちも参加できるようにしてほしい。

午前中は教養文化館で活動報告や講演でのとキリシマへの理解を深める。その後、のとキリシマを見ながら宮本康一さん宅へ移動し、どう受け継ぐかをテーマに意見交換した。

倉重祐二（新潟県立植物園副園長）▽のとキリシマは能登独自の生きた文化財。30年ツツジを研究してきて、これだけ感銘を受けた地域はない。保護するためには、文化財指定などで木を動かしにくくすることも効果がある。何らかの対策をしないと地域の宝がどんどん流出する。

廣野拓雄（㈲清廣園緑化代表取締役）▽キリシマに対して過保護ではないかという印象。雪囲いなど年間費用の問題もあり、次の世代に興味を持ってもらえなければ守るのは難しい。大切に残せる人ならば、他の地域に出すことも有効ではないか。

宮本康一（ＮＰＯ法人のとキリシマツツジの郷理事長）▽人が生んだ園芸種を保全するのは人。若い人が生まれる環境づくりとビジネスとして成り立たせることができるか。

山﨑昭宏（㈱ぶなの森インタープリター）▽能登以外にキリシマファンを作り、能登の苗木には戸籍があるという売り込みも可能ではないか。のとキリシマは時代を写す鏡だ。

前半はゲストからの活動報告や施策、事業の説明。後半は「明日から私ができるアクションプラン」をテーマにグループワーク、発表を行った。

川端登喜夫（能登町町会区長会連合会会長）▽町会区長会として力を入れていることは3つ。①１９３町内の一体感を醸成すること②一人暮らし老人の孤独死などがないよう、地域の信頼を得て地域コミュニティーの中心になること③災害に備えるために、多くの自主防災組織が立ち上がるよう研修などを受けている。

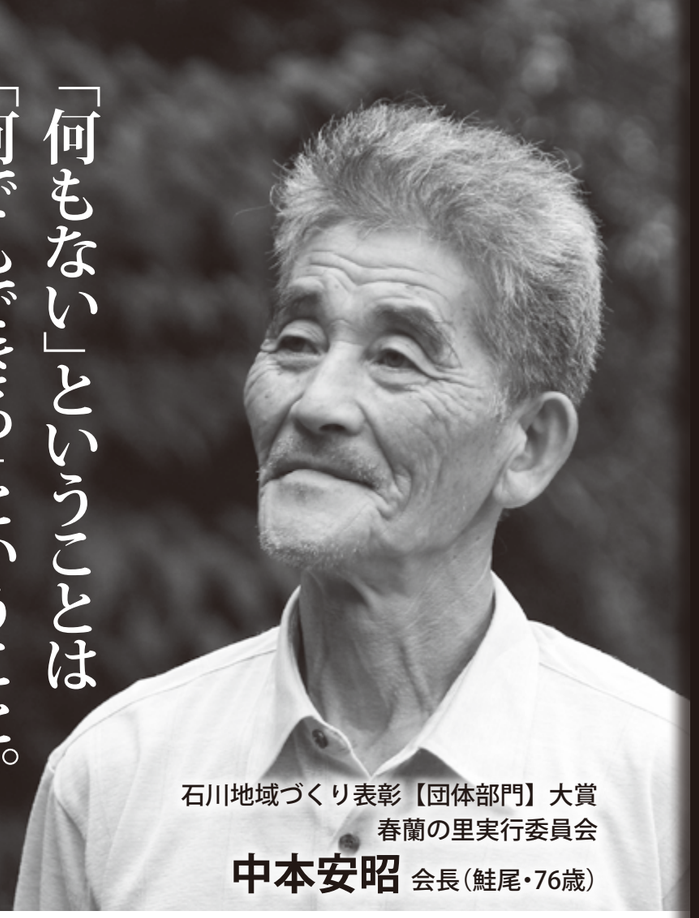
高木米子（能登町ボランティア連絡会会長）▽77団体9人の個人ボランティアと１６０２人の登録会員がバックアップしてくれる。自分も元気で地域や周りの人も元気になる活動を心がけている。限界集落には個人情報は必要ない。オープンに「助けて」と言える町づくりができたらと思っている。

上野英明（能登町地域包括支援センター社会福祉士）▽高齢化、核家族化、過疎化で、自助と共助が低下している。高齢者が元気に暮らすために地域、近所で公助の隙間を埋めてほしい。自分に何ができるのかを考え、役割分担をすることが大切。

未来へつなぐ

～石川地域づくり表彰～

石川地域づくり協会が実施する「石川地域づくり表彰」の表彰式が円陣全体会で行われた。平成24年度の団体部門・大賞に『春蘭の里実行委員会』、個人賞に『宮本康一さん（NPO法人のとキリシマツツジの郷理事長）』が選ばれた。能登町を代表する地域づくり団体となった二つの活動は、未来へつなげることができるのか―。



「何もない」ということは「何でもできる」ということ。

石川地域づくり表彰【団体部門】大賞
春蘭の里実行委員会
中本安昭 会長（鮭尾・76歳）

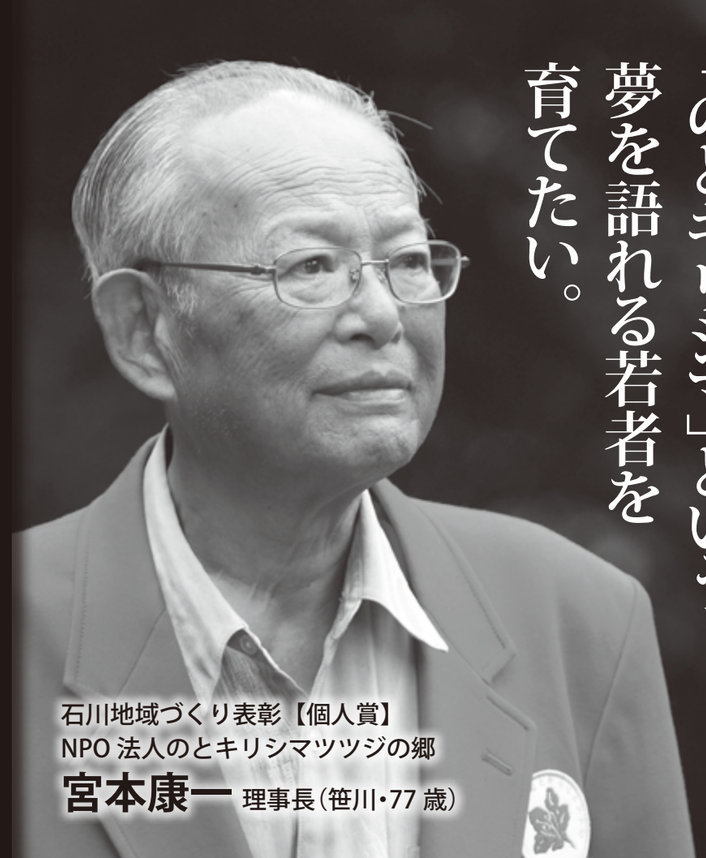
私たちが活動を始めたのは平成8年。「春蘭の花」を見てもらおうという7人の話し合いから始まりました。「春蘭の里実行委員会」として最初に賞をいただいたのが9年の「地域づくり奨励賞」でした。その後も優秀賞（13年）、個人賞（23年、多田喜一郎さん）を受賞し、今回大賞をいただきました。

地域づくりは「みんな違ってみんないい」と考える私にとって、初めてもらった「奨励賞」が一番の励みになっていました。

私は16年前から「ありふれた日本の風景が宝になる」ことを信じ、「春蘭の里を拠点として能登半島を回ってほしい」と考えていました。16年前に思っていたことが、少しずつ形になっていることを不思議に思うとともに、地域の皆さんをはじめ、行政やボランティアの協力と支援があるからできたのだと改めて感謝しています。

「何もない」ということは、決して悪いことではありません。新しいことを「何でもできる」ということです。春蘭の花、里山風景、キリコ祭り、山菜やキノコ、そして元気なお年寄り。この地域にあるものを、この地域に来てもらって楽しんでもらうために、これまで試行錯誤を重ねてきました。

活動を続けてきて良かったことは、若い人たちが参加し、育ってくれていることです。彼らには、これから全国各地の活動を見たり聞いたりして交流の輪を広げ、春蘭の里の活動を受け継いでほしいと思っています。



「のとキリシマ」という夢を語れる若者を育てたい。

石川地域づくり表彰【個人賞】
NPO法人のとキリシマツツジの郷
宮本康一 理事長（笹川・77歳）

一病息災という言葉がありますが、私の場合は二病息災。病気と闘いながらも、地域おこしに関して「猿鬼歩こう走ろう健康大会」と「のとキリシマツツジ」という二足のわらじを履いてきました。

猿鬼の実行委員長を退いてからはのとキリシマ一筋なわけですが、地域づくり個人賞として平成19年に奨励賞をいただいていました。今回2度目の受賞については、5年前と中身が違っていること、活動や交流が全国に広がっていることなど審査員が吟味をして決定したと聞きました。それだけ私たちの活動を評価してもらったということでもあり、大変うれしく思っています。個人賞ではありますが、NPO法人の会員全員でいただいた賞であり、みんなで喜びたいと思います。

昭和49年に「鉢の会」を結成後、「盆友会」となってのとキリシマにのめり込んでいったころから「のとキリシマを磨いて日本一に」という思いをずっと貫いてきました。

私たちが行ってきた品種や分布の調査、各地での展覧会や交流を経て、今ようやく「のとキリシマツツジ」という花が高く評価されるようになってきました。あとは後継者をどう組織するかが切実な問題です。これまでの活動を未来へつなげていくためにも、今後2、3年が勝負だと考えています。

私たちが培ってきた知恵や技術と、若い人たちの行動力を結びつけ、「のとキリシマ」という夢を語れる若者を育てたいと思っています。

大賞となった春蘭の里は、農家民宿のモデルとして非の打ち所がありません。①活動の国際的広がり②ユニークさや工夫③課題を克服する力④リーダー性―など、個人としても団体としてもモデルになる事例です。普通の農村をアピールし活性化したことは、ほかの地域にとって「探し出せばどこでもできる」と思わせるものです。地域資源活用事例として、ほかにないものであると言えます。

個人賞の宮本さんは、将来の目標を定めて一歩ずつ進み、一つの花からいろいろなものを見いだしています。能登から発信しているけれども、鹿児島との交流など全国に広がる活動になっていることも高く評価されました。

今回は能登町から二つの賞が出ました。春蘭、宮本さんともにこれまでの活動を総括する賞でありますが、「未来へつなぐ」という地域づくり円陣のテーマにも合った受賞だと思います。

地域づくり表彰審査委員会座長
谷本 亙（わたる）さん
まち&むら研究所代表
金沢星稜大学経済学部講師